生徒が主体的に取り組むこれからのLL授業のあり方
——コミュニケーション能力を高めるLLとティーム・ティーチングの融合した授業

東京都／筑波大学附属中学校教諭
（申請時：埼玉大学教育学部附属中学校教諭）
肥沼　則明

資料：p. 51—p. 54

1　研究の動機

中・高の英語教育の現場では，コミュニケーション能力の育成が話題にならないことがない。そして，実際の授業でも，個々の教師が試行錯誤を繰り返しながら，コミュニケーション活動中心の授業展開を行うのが主流になっている。このような流れに対して疑問はないが，着実に成果をあげる指導を行うためには，改めて自分の授業を見直す必要があるだろう。特に，授業中の言語活動はコミュニケーション能力の本質を理解した上で行われているか，個々の指導事項に関して最も効果的な方法は何かが十分に検討されているか，という視点は，現状において自分の授業を分析する上で最も重要であると言える。

さて，平成7年3月まで勤務していた埼玉大学教育学部附属中学校では，平成元年度より，英語科として「生徒が主体的にコミュニケーション活動に取り組む授業」の研究を進めた。その成果として，生徒は意欲的にコミュニケーション活動に取り組むようになったが，一方で本当にコミュニケーション能力を育成できたのかという点では具体的な結論が出せず，指導の是非を実証的にとらえる必要性が出てきた。

また，LL教室を3年生の普通授業で毎時利用できるという特殊事情（教科教室制）から，LL授業の研究にも力を入れてきた。そして，ALTとのティーム・ティーチングが本格化したことを受け，LL授業にティーム・ティーチングをいかに取り入れるかという研究を進めてきた。ところがここ数年，ALTとコンピューター室の需要が高まってきたことから，LLに対する周囲の意識は大きく変わってしまった。それはLL関係の研修会や発表会への参加者の減少にも表れており，参加者の減少を理由に開催中止になった研修会もある。では，LLはもはや時代遅れなのであろうか。生徒の学力・コミュニケーション能力を育成することには役立たないのであろうか。その効果を実感しながら指導に取り入れてきた者としては，この点について改めて真正面から取り組んでみなければならないと強く感じた。

2　研究の目的

2.1　LL授業の新しい形

LLの実際の利用法については，過去に数えきれないほどの実践報告がある。しかし，それらのほとんどはLL教室で日本人教師（JTE）が一人で運営するものであり，普通授業においてはALTとのティーム・ティーチングがごく日常的に行われるようになった現在でも，「LLは別物」という意識が強いようである。実際，筆者の調査によれば，LL授業を行っている学校の64%では，LL授業の運営にALTは一切関わっていない。もちろん，太田（1993）や石川（1994）のようにALTがLL授業に参加している実践の報告もあるが，これらは，ALTが個別指導を補佐する形で「学習活動」の強化をねらったものである。

しかし，LLによる授業がドリルを中心にした「学習活動」に目標を置き，ALTとのティーム・ティーチングが実践的な「言語活動」の機会を与えるものとするならば，この両者を同一授業に有機的に取り入れられたら，理想的な学習環境が整うのではないだろうか。具体的には，最終的な目標をある事柄についてALTと対話できることとし，そのために必要な基本的な表現をLLによって学習するという形が考えられる。

そこで，本研究の第一の目的を，LL と ALT とのティーム・ティーチングが有機的に融合した授業形態を確立することとし，その有効性と実用性を探ることを研究の柱とした。

2. 2　LL の有効利用

さて，せっかく設置されている LL 教室も，有効に利用されなければその実力が発揮できない。ところが，現実には半ば‘死んでいる’教室が少なくないという。

では，なぜ使われないのであろうか。それは，LL の授業は「大変だ」という印象があるからである。筆者の調査によれば，LL 設置校の 64%が「教材の準備が大変」と報告している。また，LL 未設置校で LL の設置を望まない学校（13 校）のその理由の第 1 位が「教材準備等の負担が増えるから」（61%）であることも，この考えを支持している。そして，この傾向は近年の LL 機器の多機能化によってさらに拍車がかけられた。LL に関する研究発表会では，ハイテク LL の機能を駆使した実践例が報告されることが多いが，むしろそれらは参加者の多くに「自分には使いこなせない。」という印象をもたせてしまい，かえって LL 離れを助長してしまっているようである。

そこで，本研究の第二の目的を，LL 教室の利用率を上げるための方法を提案することとした。そして，そのために LL の利用状況を調査し，使う側の視点からより有効な LL の利用法を探ることにした。

3　研究の方法

3. 1　研究の手順

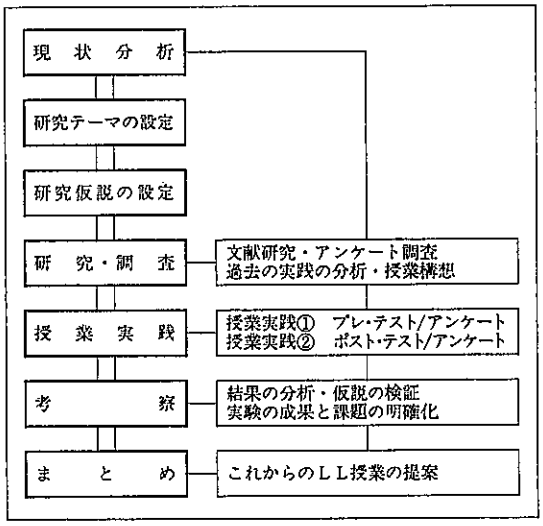
本研究を進めるにあたっては，図 1「研究構想図」のような手順を考えた。

特に，本研究では授業実践を研究の中核にすえ，その準備を綿密に行うことにした。また，そのために，理論研究だけでなく，自らの実践発表や研修会への参加も積極的に行い(資料1参照)，実践を通した着実な研究を行うことにした。

3. 2　研究仮説の設定

もともと LL は，「音声教材の個人学習を教師がどう助けていくかを狙って作られた教育機器」（保崎，1987）であるので，近年強調されている「学習の個別化」に対応するものとして，もっと重視されてよいはずである。また，言語習得における LL の効果は，海外の論文（Allen, 1960; Charest, 1962）や国内の研究（大塚，1974；町田，1976）等で報告されている。したがって，「LL は適切に使われれば英語学習に効果がある」という前提で話を進める。

図 1：研究構想図



一方，LL 授業の弱点については，これまでに次のような点が指摘されており，このような弱点を補う LL の利用法を考えなければならない。

- 単調な繰り返しによる練習は，生徒の興味・関心に合わず，活動への意欲を喚起しにくい。
- 機械相手の一方通行的な練習では，コミュニケーション能力を育成できない。

では，LL 授業に ALT とのティーム・ティーチングを取り入れたら，どのような効果が期待できるであろうか。2. 1 でも触れたとおり，ALT との実践的コミュニケーションができることをその時間の最終的な目標としたとき，LL はそこへ至るまでの基礎基本を徹底するものとして威力を発揮するのではないであろうか。この点について，浅野（1990）は「『外国人と話せるようになる』といった目標が，徐々にではあっても達成されていけば，地道な『ドリル』にも耐える学習意欲の維持につながるであろう。」と述べ，本研究に深い示唆を与えている。

そこで，本研究テーマについて実証的な結論を出すために，次のような研究仮説を設定して，その検証を行うことにした。

＜仮説 1＞

ALT との対話活動を含んだ LL の授業は LL のみの授業より生徒のプロダクション能

力を高めることができる。

＜仮説 2＞
ALT との対話活動を含んだ LL の授業は，LL のみの授業より生徒を意欲的に LL 学習に取り組ませることができる。

4 研究の実際

4.1 コミュニケーション活動の分析

4.1.1 コミュニケーション活動の条件

授業において「コミュニケーション活動」を行うとき，本当にそれが生徒のコミュニケーション能力を育成するものなのかを考えなければならない。さらに言えば，「コミュニケーション能力」とは何かを理解した上で活動を考えないと，苦労して準備し行った活動も効果があがらない。

さて，Dance & Larson（1976）は，「コミュニケーション」という語には様々な分野から 126 もの定義がなされているとしているが，より身近なところでは「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」（広辞苑）と定義されている。注目すべきは，ことばそのものよりもそのことばによって伝え合う内容に視点が置かれていることである。

また，Canale（1980）は，Savignon（1983）とともにコミュニケーション能力（Communicative Competence）には四つの下位構成能力（Grammatical, Discourse, Strategic, Sociolinguistic の各 Competence）があるとしているが，ここでも，この仮説を支持することにする。したがって，言語活動によってコミュニケーション能力を育成することを考えるときには，その活動が上記のどの要素を伸ばすものなのかを分析し，四つの要素を総合的に高められるように計画的に行わなければならない。

そこで，ここでは授業における「コミュニケーション活動」成立の条件を次のとおりとする。

①四つの Competence のいずれかを伸ばす活動
②内容を伝え合うことに重点を置き，結果的に表現の習得ができる活動
③活動を行う必然性（動機，インフォメーション・ギャップ等）がある活動

4.1.2 コミュニケーション活動の留意点

授業における学習活動や言語活動を考えるとき，最も重視しなければならないのは，生徒が主体的に活動できるようなものを提供することである。それは，受け身の姿勢では学習効果があがらないからである。ただし，それは必ずしもゲーム的活動のような表面的な楽しさを必要とするものではない。筆者のこれまでの実践研究では，次の四つの点が重要であることがわかった。

① ねらいが明らかな活動

タスクがはっきりしていて意欲がわく。また，目標をもたせることで，より充実した活動を行うようになる。

② 達成度を自己評価できる活動

達成度を評価させることによって成就感や課題を意識させ，次の活動への意欲を喚起する。

③ 主体を生徒に預ける活動

活動時間をできるだけ多く確保し，生徒同士が活動する中でお互いに高め合う機会を与える。ただし，事前に十分な教師主導の活動が必要である。

④ 継続的に行える同一内容の活動

小さな積み重ねで確実な力をつけられる。また，生徒の創造性や豊かな発想を引き出すことができ，変容ぶりも観察できる。

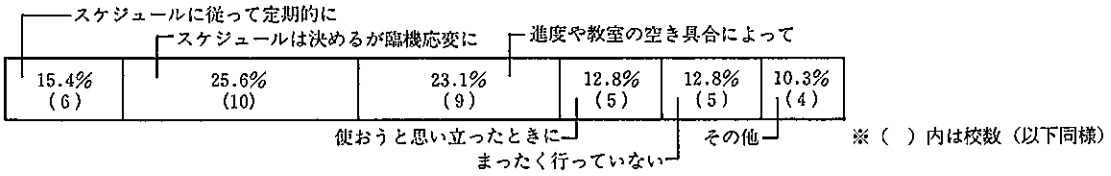
なお，LL 学習におけるものではないが，これらの条件を満たす具体的な活動例は，肥沼(1995)に詳しく紹介されている。

4.1.3 LL 授業のコミュニケーション活動

では，LL 授業で生徒のコミュニケーション能力を育成する活動には，どのようなものが考えられるであろうか。残念ながら，LL 機器のみを利用して行う活動例の中にそれを探すのは難しい。LL には，生徒同士にペアやグループを組ませて，ヘッドホンとマイクを通して対話をさせる機能があるが，それを使った活動は，コミュニケーション活動としては不自然である。むしろ，この場合は，直接目と目を合わせて対話させたほうが，より自然なコミュニケーションの場面を設定できる。やはり，LL は「学習活動」を強化するものとして割りきったほうがよいであろう。

そこで，LL 授業におけるコミュニケーション活動の場面を考えてみる。一つは，LL 学習を進める中で行われる教師とのインターアクションである。活動の指示や指導，質問などが英語でなされれば立派なコミュニケーション活動となるのは，普通授業と共通である。さらに，相手が ALT であればより効果的であり，機械的指示では対応し

図2: 問4　貴校では，LLを利用した英語の授業をどのような形で行っていますか。



きれない部分をネイティブ・スピーカーから得られれば効果が上がる。そして，もう一つが本研究で提案しているような，ALTとの対話をLL学習の成果を試す場面に位置づける活動である。このタイプの活動の特徴は，LL学習で主にGrammatical Competenceを高め，ALTとの対話活動で主にStrategic Competenceを高められるということである。また，学習活動という点では，LL学習そのものの質が高められるということも大きな利点である。したがって，LL授業においても，**4. 1. 2**にあげた四つの重要点を満たす活動を設定することができる。

4. 2　LL教室設置および利用実態調査

4. 2. 1　調査の主旨と対象

本研究を進めるにあたっては，LLを使う立場の教師がLLに対してどのような意識をもち，どのようにLLを利用しているのかを知る必要があった。なぜなら，実態の把握なしには，LL授業について議論できなかったからである。

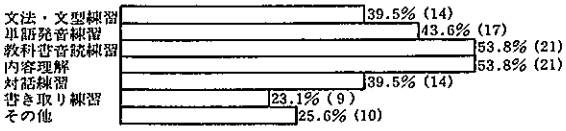
そこで，中学校英語科教師を対象に「LL教室設置および利用実態調査」というアンケート調査を行い，LLの利用状況，LLとティーム・ティーチングの関連性，LLの問題点等について回答を求めた。

アンケート作成にあたっては，山内（1993），日本教育工学振興会（1995）の調査を参考にした。ただし，本調査がこれらと大きく違う点は，調査対象をLL未設置校も含めたことで，LLに対してのイメージやLLを導入する際の障害についても知ることをねらってみた。

調査用紙は，埼玉県中学校英語教育研究会役員100名，LLA関東支部中学校教員会員38名，埼玉県内LL設置中学校36校，練馬区立全34中学校，その他14名の計222名（219校）に送付し，督促なしで計98通（回収率44%）の回答を得た。なお，回答者の内訳は次のとおりである。

○LL設置校……　39校（国2，公34，私3）
○LL未設置校…　59校（公54，私5）

図3:　問7　貴校では，LLを授業のどの部分で利用していますか。



4. 2. 2　調査結果の考察

アンケート調査結果のすべて（設置校24項目，未設置校10項目）を取り上げるのは本研究の主旨からはずれるので，ここでは特に，研究内容に直接関わるもののみ取り上げることにする。

(1)　LLの利用状況

まず第一に，LLを使う授業はどの程度行われているのかを探ってみる。(図2)

定期的にLLを使っているのは全体の15%であり，LL授業の教育課程における位置は依然として高いとは言えない。しかし，一方で72%の学校が必要に応じて臨機応変に利用しているという状況もあり，回答校に限って言えば，LLの利用率は予想以上に高かった。

次に，指導過程のどの部分でLLを利用しているかを探ってみることにする。(図3)

LLの利用度の高い指導項目は，反復練習の徹底により学習の定着度を高めるものが多く，LLの実力が発揮できるように使われている。

なお，これらの指導項目では教材の準備が比較的容易であることも結果の要因の一つと考えられる。

以上のことから，LLの利用度については「必要な時に必要な指導項目で利用する」という学校が多いことが明らかになった。

(2)　LLとALTの必要性

ここでは，LLとALTの関連について両者の必要性を教師がどのように考えているかを，LL設置校と未設置校で比較してみた。(図4)

LL設置校の多くがLLとALTの両者の必要性を感じていることがわかった。興味深いのは，LL未設置校でもLLの必要性は認めていること

図4: 問19／26 LLの授業とALTの関連について，両者の授業における必要性をどう思いますか。

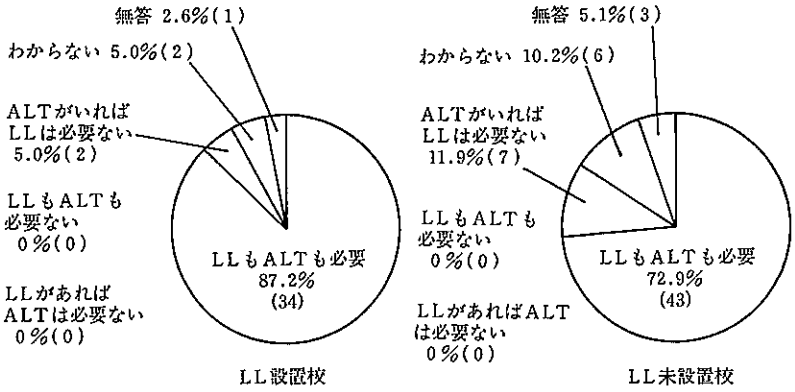
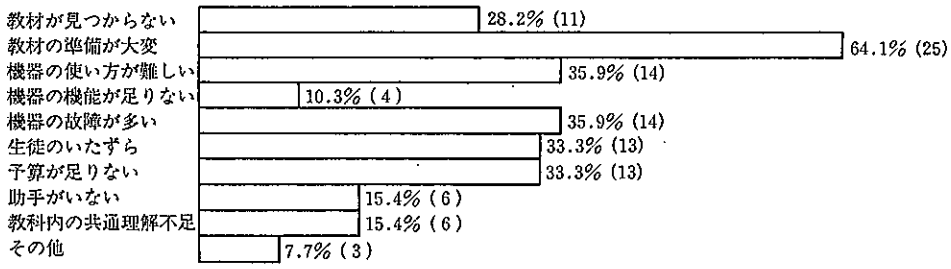


図5: 問20 LLを行う上での問題点は次のうちどれですか。(複数回答可)



で，ではなぜ実際にLLを導入することには消極的なのかという点は議論する必要があるであろう。

(3) LLの問題点

ここでは，実際に使用している立場からLL指導を行う上での問題点を指摘してもらい，LL授業を側面から支える部分の改善点を探りたい。(図5)

回答は，ハードの使いづらさと管理の難しさ，そしてソフトの不足に集中しており，山内(1993)が高校のLL設置校に対して行った調査の結果と似ている。これらの中には教師の一層の努力で改善が可能なものもあるが，より多くの教師にLLの良さを認識してもらうためにも，ハードやソフトを作る業者に次の2点を要望したい。

①機能を簡素化した機器を開発する(ハード面)
→・教師，生徒ともに使いやすくなる
・低価格となり，予算化しやすくなる
・精密な部品が減り，耐久性が向上する

②教科書準拠のLL教材を整備する(ソフト面)
→・教育課程に合わせた指導ができる
・教材準備が容易になる

4.3 過去の授業実践の分析

4.3.1 過去の授業実践

埼玉大附属中学校英語科では，LLとALTとのティーム・ティーチングの融合を目指していくつかの授業パターンを考察し，これまでに何度か研究会で発表をしてきた。ここでは，それらの授業の成果と問題点・課題点を明らかにし，あとに行う研究授業の構想を練る上での基礎資料とする。

(1) 授業パターン1

○実施時期　平成4年6月
○対象生徒　3年生
○指導過程(LLを使用した部分のみ)

> 3 コース別学習(配当時間: 15分)
> (1) コース選択
> A: 基本的な対話表現をLLで個別練習
> B: 応用的な対話表現をLLで個別練習
> C: 個人がテーマに沿ってALTと対話
> (2) コース別学習実施

○実施上の配慮事項
・三つのコースを設け，学習内容に幅をもたせる。
・コースは自分の意志で選択させる。
・他のコースに途中で変えることも可とする。

○活動の成果

結果的に各コースを選択した生徒の数は，ほぼ均等になった。そして，各生徒とも大変意欲的に

取り組んだ。その最大の原因は，自分で学習するコースを選択できたためであることが実施後のアンケートで判明した。

○問題点・課題点

この活動の最大の問題点は，Cコースを選択した生徒以外はALTと話す機会が与えられなかったということである。A・Bコースの生徒は，せっかく練習して身につけた表現を，ALTに対して試すことができなかった。LLとALTとのティーム・ティーチングの融合という点では，この部分の改善が必要となった。

(2) 授業パターン2

○実施時期　平成5年2月

○対象生徒　1年生

○指導過程（LLを使用した部分のみ）

> 4　ALTとのインタビュー活動
> （配当時間：40分）
> (1) LLプログラム1で対話文の個別練習
> (2) ALTにインタビュー（ペア）
> (3) インタビュー結果をJTEに報告
> (4) LLプログラム2で目標文の個別練習
> Aコース：(1) → (2) → (3) → (4)
> Bコース：(4) → (1) → (2) → (3)

○実施上の配慮事項

- LL学習ののちに全員をALTと対話させる。
- コースはペアの意志で選択させる。
- ALTとの対話に時間差を設定（コース別）。

○活動の成果

全員にALTと対話できる機会が与えられたということで，生徒はLL学習とインタビュー活動の両方に対して実に意欲的に取り組んだ。特に，ペアを質問係と記録係に分けたにもかかわらず，一生懸命練習した成果を発揮したくて，記録係も積極的にインタビューする姿がうかがえた。

○問題点・課題点

最大の問題点は，ALTとの対話活動に時間差を設けたにもかかわらず，実際には時間内にALTと対話できなかったペアがいたことである。テーマにそって自由に対話させたので，一つのペアで時間をとってしまい，行列ができてしまった。この点を改善する方法を考えることになった。

(3) 授業パターン3

○実施時期　平成5年6月

○対象生徒　3年生

○指導過程（LLを使用した部分のみ）

> 4　コース別学習（配当時間：35分）
> (1) コース選択
> Aコース（基本コース）
> ①基本文と基本対話表現をLLで個人練習
> ②JTE相手のインタビュー練習（ペア）
> ③ALTへのインタビュー活動（ペア）
> Bコース（応用コース）
> ①やや応用的な対話表現をLLで個人練習
> ②ALTへのインタビュー活動（ペア）
> ③インタビュー結果をJTEとQ&A
> (2) コース別学習実施　（ペア）

○実施上の配慮事項

- LL学習ののちに全員をALTと対話させる。
- コースはペアの意志で選択させる。
- ALTとの対話に時間差を設定（コース別）。
- JTEをクッション役に入れ，さらに調整する。

○活動の成果

インタビュー内容にテーマを設け，あらかじめ十分に考えさせておいたので，生徒は実に意欲的にしかもスムーズに活動した。また，JTEのクッション役は，インタビュー活動の時間差調整に役立っただけでなく，基本コースの生徒の対話活動への情意フィルターを和らげることと，応用コースの発展的活動の充実にも大いに効果があった。

○問題点・課題点

JTEによる時間調整を加えたにもかかわらず，どうしても全員にインタビュー活動をさせることができなかった。インタビュー内容を深めれば深めるほど時間との戦いになるというジレンマに陥ってしまったわけである。ALTとの対話活動は，内容を抜本的に見直す必要が出てきた。

4.3.2 研究授業実施への課題点

(1) LL学習とALTとの対話の関連

過去の実践から，具体的な達成目標であるALTとの対話をLL学習のあとに位置づけるという過程は，LL学習そのものへの取り組み意欲を高めること，そしてLL学習は，ALTとの対話を行うための練習として効果があることも実感できた。

しかし，これらの活動に対しては次のような課題点も指摘されており，授業をデザインする際に

考慮することになった。

・個々の生徒の学力差にどのように対応するのか。
・LL学習に費やす時間をALTとの対話活動に振り向けたほうが効果的ではないか。
・コース別にした場合の評価をどのように行うか。

(2) ALTとの対話時間確保の問題

ALTとの対話を時間内に全員が行えないという問題点は，本研究を進めるにあたって解決しなければならない最も重要な点である。なぜなら，生徒はALTとの対話を行えるという前提があるからこそ意欲的にLL学習に取り組むからである。もちろん，2時間以上の枠で構成すればこの問題の解決は容易になるが，多くの学校で連続してLL教室を使えないという条件を考えると，単位時間で完結する指導過程に絞るべきであろう。

時間内に全員がALTと対話できなかった最大の理由は，テーマにそったインタビュー形式をとったからである。この活動そのものは真のコミュニケーション活動として大変意義のあるものであったが，全員にその機会が保証されなければ意味がない。そこで研究授業では，LL学習やALTとの対話活動への取り組みの姿勢を強化することにねらいを定め，思い切ってALTとの対話をシンプルなものにすることにした。具体的には，話す文の数を制限する方法で対処することにした。

4.4 研究授業構想

4.4.1 目 的

本研究授業は，これまでの研究内容を実証するために行う。内容的には，普通授業を，LLを要所に取り入れて展開した場合と，LLとティーム・ティーチングを組み合わせた形で展開した場合の，生徒のプロダクション能力の差とLL学習への取り組みの意欲の差を検証することを目的とする。なお，期待される結果（仮説）は3.2「研究仮説の設定」に述べたとおりである。

4.4.2 方 法

本授業には，研究成果の実証というねらいがあるので，必要なデータを授業中にとる必要がある。したがって，指導過程の細かな部分では通常行う授業とは内容的にやや異なる事柄が含まれている。

(1) 実験授業を「研究授業①」と「研究授業②」の2時間構成とする。
(2) 実験群（LLとTT：1クラス）と統制群（LLのみ：1クラス）の生徒を対象にする。
(3) 両群の生徒のプロダクション能力に有意差がないことを確認するためにプレ・テストを行う。また，授業後の意識の変化をつかむために，LL学習に関するアンケートをとる。（第1時）
(4) 本授業の最後にプロダクション能力についてのポスト・テストを行う。また，LL学習に関するアンケートをとる。（第2時）

なお，現勤務校にはLL教室が設置されていないので，前任校（埼玉大学教育学部附属中学校）のLL教室で同校の3年生2クラス（2／4）を対象に行うことにした。

4.4.3 データの測定

(1) プレ／ポスト・テスト

① 内容

ア） 教科書本文の内容についてのQ&AのAを録音する。
イ） 目標文の口頭作文演習の答えを録音する。

② 採点

英検3級の二次面接試験の評価基準に準じて5点満点で採点する。採点者は筆者を含む2名。

(2) プレ／ポスト・アンケート

① 内容（※項目の要点のみ）

ア） LL学習は好きか。［好み］
イ） 自分のペースでできたか。［個への対応］
ウ） 聞き取る力がついたか。［聞く力］
エ） 読む力がついたか。［読む力］
オ） 話す力がついたか。［話す力］
カ） LL学習にはいつも意欲的か。［意欲］
キ） 今日のLL学習には意欲的か。［意欲］
ク） LL装置は使いやすいか。［操作性］

② 回答方法

それぞれ7（かなりそう思う）から1（まったくそう思わない）までの7段階で答える。

4.4.4 配慮事項

(1) 教育的配慮事項

本授業は「実験」授業であるが，あくまで公教育の中の通常の指導の範囲で行うものであるので，次のような点を配慮して計画した。

① 研究授業に関わらない残り2クラスとの指導内容の差を極力小さくするために，LLの教材は教科書の練習問題を利用したものとする。
② 実験群，統制群の授業内容の差は，指導の際のアプローチの差とし，最終的に生徒に身につ

けさせたいものは同じものになるようにする。

③ 正規の教科担任が進めている指導計画に合った授業を行い，生徒の動揺を最小限に抑える。

(2) 実施上の留意事項

限られた条件下で行う授業であるので，今回の授業はやり直しがきかない。そこで，授業の成果を確実に上げるために，次のような点に留意した。

① テープ教材は，生徒分を含めてあらかじめすべて録音しておく。

② 授業中に使うすべてのLLの操作を生徒に慣れさせておく。

③ データの信頼性を高めるために，活動中の個別指導（発音矯正，作文補助等）は行わない。その代わりに，教材テープに細かい指示と段階的練習を組み込む。

④ 二つの研究授業の間に行われる普通授業（2時間）は，実験群・統制群の指導内容に差がないように教科担任と打ち合わせる。

⑤ ALTとの打合せを綿密に行い，本研究の主旨を理解した上で指導にあたってもらう。

ところで，これらの実施上の留意点を厳密に守ることは，結果的には準備のために大変な労力を要することになった。これは，本研究の目的の一つである「気軽にLL授業を行う方法を提案する」という方針に逆行するものであるが，本授業に限っては，研究の成果を実証するための特別な授業ととらえていただきたい。

5 授業実践

5.1 研究授業①

5.1.1 授業の目的

本研究において，授業の実践は不可欠である。しかし，他校の生徒に対して行うことを考えると，たった一度の授業で研究の成果を出すことは難しい。そこで，本番を「研究授業②」とし，その授業の準備と指導内容に対する結果の比較を行うために，研究授業①を設定した。また，本授業のもう一つの目的は，研究授業②をスムーズに進めるために，当日の授業の流れ，使うLL機能，そして授業者に慣れさせることであった。したがって，あらゆる事態を想定して，指導内容・教材は十分に検討して準備した。

5.1.2 学習指導案

(1) 実施日　平成7年10月24日（火）

(2) 対象生徒　埼玉大附属中学校3年生2クラス（84名）

(3) 教　材　Sunshine English BK3 Pro. 5 [2]

(4) 指導目標（研究に関するもののみ）

① LLを使うことに慣れ，LL学習をとおして積極的にコミュニケーションしようとする態度と能力を養う。

② 関係代名詞の目的格を用いて，適切な場面で正しく表現できるようにさせる。

(5) 生徒の実態

LLはほぼ毎回何らかの機能を使ってきており，機器操作には慣れている。なお，授業者のことを知ってはいるが，授業を受けるのは初めてである。

(6) 使用するLL機能

・一斉録音　・個人練習　・アナライザー

(7) 準　備

・マスターテープ　・生徒用録音済みテープ
・LLワークシート　・テスト／アンケート

(8) 指導過程（実験群，統制群とも同一）

1. Greeting
2. Self-introduction
3. Review Reading
   (1) Tape Listening
   (2) Choral Reading
   (3) Individual Reading (LL)
   (4) Choral Reading
   (5) Q&A (Pre-Test 1: Answers Recorded)
4. Introduction of the New Words
5. Reading
   (1) Silent Reading
   (2) T/F Quiz (Analyzer)
   (3) Check of Understanding
   (4) Tape Listening
   (5) Choral Reading
   (6) Individual Reading (LL)
   (7) Choral Reading
6. Further Practice on the Target Sentence (Pre-Test 2: Answers Recorded)
7. Consolidation (Pre-Questionaire)

5.1.3 授業反省と考察

(1) 指導目標に関して

① LL学習への取り組みの様子

LLを使った各活動では，実に意欲的に取り組

む姿勢が見られた。特にアナライザーを使ったTFクイズでは，過去に経験がなかったこともあり，正答のフィードバックがあるたびに歓声があがるほど好評であった。

② 目標文の定着について

LL学習後の録音テストを分析したところ，徹底した演習のおかげで，示された場面を目標文を使って表す基本的な力は身についたようである。(プレ・テスト正答率平均：85%)

(2) 研究授業②に向けての課題

研究授業②は，本授業にALTとのティーム・ティーチングが加わることが最大の特徴である。目標を達成するためには，ALTとの意思統一が必要であり，十分な打ち合わせをどれだけできるかが鍵であろう。また，LL学習の部分で生徒にどれだけ素早く正確に活動内容を理解させられるかということも授業の成否に関わる重要な点である。したがって，一つ一つの指導項目について，生徒の視点に立って細かい流れを検討しておかなくてはならないと考えた。

5.2 研究授業②

5.2.1 授業の目的

研究授業②は，これまでの研究の成果を授業において実証することを目的として行う。そのために，次のことを特別に指導過程の中に入れる。

- 指導項目により，LLとALTとの対話活動を融合させた学習形態のもの(実験群)と，LL学習のみによるもの（統制群）を設ける。
- 口頭作文テストを行い，学習形態のちがいによる目標文定着度の差を測定する。(ポスト・テスト)
- LL学習に関する意識調査を行い，学習形態のちがいによる意欲の差を測定する。(アンケート)

5.2.2 学習指導案

(1) 実施日　平成7年10月31日（火）

(2) 対象生徒　埼玉大附属中学校3年生2クラス（84名）
研究授業①同一(実験群/統制群)

(3) 教　材　Sunshine English BK3 Pro. 5 [WS]

(4) 指導目標（研究に関するもののみ）

① LL学習をとおして，積極的にコミュニケーションしようとする態度と能力を養う。

② 現在分詞と過去分詞の後置修飾を用いて，絵の表す内容を口頭で説明できるようにさせる。

(5) 生徒の実態

両群の生徒とも，研究授業①のあと，LLを取り入れた普通授業を2時間受けている。

(6) 使用するLL機能

・一斉録音　・個人練習　・アナライザー

(7) 準　備

・マスターテープ　・生徒用録音済みテープ
・LLワークシート　・テスト／アンケート

(8) 記　録（LLA関東支部後援）

・ビデオ3台，マイク6本（教師2，生徒4）
・撮影／編集：滝本晴男先生（大妻女子大学）

(9) 指導過程（凡例：【実験群】《統制群》）

1. Greeting
2. Review Reading
   (1) Listening【ALT】《Tape》
   (2) Choral Reading【ALT】《Tape》
   (3) Individual Reading (LL)
   (4) Choral Reading【ALT】《Tape》
3. Questions & Answers (Post-Test 1: Answers Recorded)【ALT】《Tape》
4. Workshop (LL)
   (1) Check of Understanding (A:Analyzer)
   (2) Practice on the Target Sentence and Pronunciation (B〜C: LL)
      Group 1: B→C→D
      Group 2: C→D→B
      Group 3: D→B→C
   【Conversation with ALT after C】
5. Further Practice on the Target Sentence (Post-Test 2: Answers Recorded)
6. Consolidation (Post-Questionaire)

5.2.3 LL教材

本授業におけるLL教材は，**4.4.4**で述べたように，教科書の「WORKSHOP」の問題を利用して作成した。各問題の作成ポイントは，**表1**のとおりである。

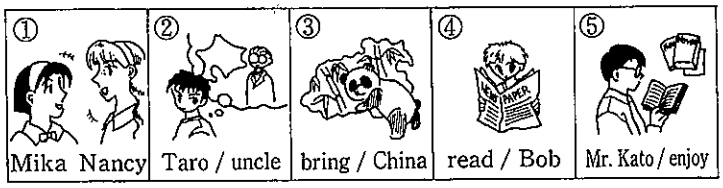
特に，問題Cは本授業において研究の鍵となるものである。実験群では，学習終了後にALTとの対話(ここでは絵の内容について説明する活動)を予定しており，それに対応できるものとした。

なお，実験群の問題では，練習のあとにALTとの対話があることを説明文に加え，あらかじめ

【作成したLL教材】

問題C（カウンターNo. 075）　<7分>

問題Cは，絵の表す内容をヒントの単語を用いて説明する問題です。



C-1　絵とヒントの単語を見て，絵の内容を説明する英文を聞きましょう。
C-2　絵とヒントの単語を見て，絵の内容を説明する英文をテープのあとについて言ってみましょう。
C-3　絵とヒントの単語を見て，絵の内容を説明する英文を合図のあとに言ってみましょう。
C-4　絵の内容を説明できるようになったら，David 先生のところに行って，絵の内容を説明し，「正解シール」をもらい，右の四角の中に貼りましょう。
ただし，David 先生が示す絵について1つだけ説明できればOKです。

シール

【教科書の問題】

Ⓒ（　）内の語を適当な形にかえて，それぞれの文を完成しましょう。
1. The girl (talk) with Nancy is Mika.
2. I have an uncle (live) in Hokkaido.
3. This is the animal (bring) from China.
4. The boy (read) a newspaper in the library is Bob.
5. Mr. Kobayashi enjoys books (write) in English.

［編集部注，実際の問題には，パンダのイラスト入り（省略）］

表1：【問題作成のポイント】

問題	教科書 Workshop 問題	LL 演習問題
A	教科書内容のT／F	同左（アナライザー使用）
B	関係代名詞で2文を1文に	同左（口頭作文）
C	（　）内の語を変えて後置修飾の文を完成	同左の文を絵の内容を説明する形で練習（文は見せない）
D	母音とアクセントの区別	同左を実際に練習

活動への意欲づけを行った。

その他の問題は資料を参照されたい。

5. 2. 4　授業分析

本時のLL学習については，どの活動においても生徒は大変意欲的に取り組んでいた。活動の配当時間が30分（実際33分）という長時間で「飽き」を心配したが，内容がバラエティーに富んでいたため，それを解決できたようである。活動の様子を紙面で伝えるのは難しいが，授業の模様を撮影した滝本晴男氏（大妻女子大学情報教育センター）は，「これまでに何十本ものLL授業を撮影したが，生徒がこれほどまでにLL学習を楽しんでいるのを見たのは初めてである。」と評価した。

また，LL学習に続いて行われたコミュニケーション活動（実験群：問題C）は，ALTの指した絵の内容を後置修飾を含んだ文で説明するというものであったが，どの生徒もLLで練習した成果を発揮して，スムーズに説明できていた。

また，過去の実践で課題となっていた全員実施についても，絵の内容を説明するという場面設定により解決できた。ただし，その代償となったことも何点かあり，後に授業ビデオを公開したLLA関東支部第2回研究大会でも，次のような指摘を受けた。

- 絵の内容を説明するという能力は，プロダクション能力全体を代表するものではない。
- 全員をALTと対話させるというねらいがなければ，もっと自由に話させたほうがよい。
- データ採取という目的がなければ，LL学習中の個別指導を行ったほうがよい（途中で指導されるのはきらいである，という反対意見有り）。

6　結果の考察

6. 1　前提条件の確定

実験群と統制群の生徒について，プロダクション能力とLL学習への意欲に有意差がないかをプレ・テストおよびプレ・アンケートより調べた。

表2は，実験群と統制群のプレ・テストにおける得点の平均と標準偏差を示したものである。t検定の結果，両群の平均の差は有意ではなかった

(両側検定: $t(78)=1.15$, $p>.10$)。一方，表3は，両群の生徒に対して研究授業①のLL学習への取り組み意欲を尋ねたアンケートの回答の集計である。x^2検定（イエーツの修正式）の結果，回答の偏りは有意ではなかった（$x^2(3)=3.48$, $p>.10$)。

したがって，両群の生徒のプロダクション能力とLL学習への意欲に有意な差はなく，ポスト・テストおよびアンケートにおいて両群を比較できることになった。

表2:【プレ・テスト　集計結果】

	実験群	統制群
N	40	40
$\bar{X}$	27.2	29.0
SD	7.4	6.4

35点満点

※実験群・統制群ともに2回の授業にそれぞれ1名ずつ欠席者がいたので，その分を除外した。

表3:【プレ・アンケート: 問7　集計結果】

問: 今日のLL学習には意欲的に取り組みましたか。

	7 かなりそう思う	6 そう思う	5 比較的そう思う	4 どちらとも言えない	計
実験群	19	12	4	5	40
統制群	22	11	5	2	40

※3〜1（「比較的そう思わない」以下）の度数は0であった。

6.2　仮説の検証

6.2.1 「仮説1」の検証

表4:【ポスト・テスト　集計結果】

	実験群	統制群
N	40	40
$\bar{X}$	22.5	20.9
SD	3.1	3.6

25点満点

※実験群・統制群ともに2回の授業にそれぞれ1名ずつ欠席者がいたので，その分を除外した。

表4は，実験群と統制群のポスト・テストにおける得点の平均と標準偏差を示したものである。t検定の結果，両群の平均の差は有意であった（両側検定: $t(78)=2.10$, $p<.05$)。したがって，ALTとの対話活動を含んだLLの授業は，LLのみの授業よりも，絵の内容を説明するというプロダクション能力をより効果的に高められることがわかり，仮説1は支持された。

今回の結果が得られた原因は，ALTとの対話活動が結果的にポスト・テストの予備テストのような働きをしたためと推測される。つまり，ALTとの対話活動によって学習内容の定着が強化されたわけである。

6.2.2 「仮説2」の検証

表5は，実験群の生徒に対して研究授業②のLL学習への取り組み意欲を尋ねたアンケートの回答の集計である。なお，期待度数は統制群の回答比率（人数）に基づいている。

x^2検定の結果，回答の偏りは有意傾向であった（$x^2(3)=7.54$, $.05<p<.10$)。したがって，ALTとの対話活動を含んだLLの授業は，LLのみの授業より生徒を意欲的にLL学習に取り組ませることに効果があることが示唆された。統制群が長時間にわたるLL学習に対してやや食傷気味で，プレ・アンケートに比べてポイントが下がってしまったのに対し，実験群は逆に大幅に上がった。これは，ALTとの対話活動を成功させたいという意識から出た結果と言えよう。仮説2について統計的に完全な支持を得ることはできなかったが，内容的にはプレ・アンケートの結果を逆転するような数値を得ることができた。

表5:【ポスト・アンケート: 問7　集計結果】

問: 今日のLL学習には意欲的に取り組みましたか。

	7 かなりそう思う	6 そう思う	5 比較的そう思う	4 どちらとも言えない	計
観測度数	25	7	7	1	40
期待度数	18	11	6	5	40

※3〜1（「比較的そう思わない」以下）の度数は0であった。

6.3　実験の成果と課題

6.2の結果により，二つの研究仮説は大筋で証明された。また，これによって「LLとALTとのティーム・ティーチングを有機的に融合した授業形態を確立する」という本研究の第一目的を達成できた。ただし，本実験は次のような特殊な点を含んでおり，結果を直ちに一般化できるとは考えていない。

- 本実験の結果は，一定期間継続的に行った授業で得られたものではない。また，この結果は，実験直後の定着度を示したものである。
- 研究授業という特殊性を生徒が意識し，日頃と違う取り組みをした可能性がある。
- もともと生徒の学習意欲が相対的に高かった。（逆に差がつきにくかった。）

これらについては，事情により追指導を行っていないが，いずれ条件を変えて再度挑戦したい。

7　提案

本研究を終えるにあたって，アンケート調査と

授業実践の成果をもとにいくつかのことを提案したい。特に，新規にLLを導入しようと計画している学校や現在LL教室の利用に消極的な学校に対して勧めたいことを述べる。

7.1 LL授業に対する意識改革

《LLの効果の再認識を》

今回の研究実践では，主にLLとALTとのティーム・ティーチングの関連について述べてきたが，LLを取り入れるだけでも相当の効果があることも強調したい。例えば，教科書の音読では，個人練習を3分間やらせるだけで，その後の一斉音読は感覚的に2倍の音量が出る。要は，自信をもって読めるようになるまでじっくり練習できる機会を与えることであり，それにはLLが最もよい。

《普通授業にLLを》

LL授業だからといって特別な授業をしようと構えず，LL教室で普通授業を行い，LLを使ったほうがより効果的だと思われる指導項目で気軽にLLを使ってみていただきたい。使わないよりは絶対によい。また，LL教材は教科書テープからも思いのほか簡単に作れる。

7.2 LL教室の普通教室化

《特定の学年の英語教室に》

ある学年の英語の授業はすべてLL教室で行うようにする。ドリル中心という性格から1年生の授業教室とするのが最適であろう。いつでも使いたいときに使えるのが最大の利点である。

《全クラス週1時間はLL教室で》

各学年8クラスくらいの規模の学校までなら，一つのLL教室に全クラス週1時間を割り当てることは物理的に可能である。実際にそうして有効に利用している学校がある。また，「英語教室」として海外の情報を展示すれば，全校の生徒に対して国際理解教育を行う場所にもできる。

8 おわりに

LL授業のあり方について，本研究では，ALTとのティーム・ティーチングと気軽にLLを使う方法という二つの切り口で研究を進めてきた。残念なのは，現任校にLL教室がないために，今後は実践研究が進められないことである。しかし，議論は続けたいので，ご意見を勤務先（〒112 東京都文京区大塚1-9-1）までお寄せいただきたい。

最後に，本研究にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。特に研究の方向性について示唆をくださった羽鳥博愛先生と大友賢二先生，研究授業をさせていただいた埼玉大附属中学校英語科の先生方，アンケートにご協力くださった先生方，LL授業を公開してくださった先生方，資料を送っていただいた先生方，研究の相談にのっていただいた先生方には，心より感謝いたします。

参考文献

*Allen, E.D. (1960). The effects of the LL on the development of skill in a foreign language. *The Modern Language Journal*, 44 (8).

安藤賢一他. (1988). *Elementary LL English Course, Teacher's Manual.* 東京：大修館書店

浅野紀和・浅野幸子. (1984).「LL指導上の問題点とClose法」『LL通信』No. 116, 2-6. 東京：ソニー.

*浅野博. (1990).「言語習得からLLの役割を考える」『LL通信』No. 153, 10-12. ソニー.

荒巻基文. (1988).「コミュニケーション重視のLL用ドリル教授法」『LL通信』No. 143, 13-15. ソニー.

*Canale, M. (1980). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J.C. Richards & Schmidt, R.W. (Eds.). (1983). *Language and Communication*, 2-27. Longman.

*Charest, G.T. (1962). The Language Lab and the Human Element in Language Teaching. *The Modern Language Journal*, 46(6).

*Dance, F. & Larson, C. (1976). *The Functions of Human Communication*, Halt, Rinehart & Winston. 伊東治己. (1994).「『コミュニケーション』活動とは」『英語教育』Vol. 43, No. 4, 8-10, 大修館書店.

藤重敦臣. (1987).「LL教室VS普通教室」『LL通信』No. 80, 26-28, ソニー.

*保崎則雄. (1987).「LLの失敗を繰り返さないCAIの応用」『現代英語教育』Vol. 23, No. 12, 38-40. 東京：研究社出版.

飯森正志. (1986).「LLを使った授業」『英語教育』Vol. 34, No. 13, 25-27. 大修館書店.

*石川賢司. (1994).「TEAM TEACHINGをLL教室で行う授業」『LL通信』No. 177, 22-23. ソニー.

柿沼栄一. (1974).「教育研修でのLLの活用」『LL通信』No. 57, 8-9. ソニー.

北尾謙治他 (1986)「英語の表現能力をいかに測定するか」『英語教育』Vol. 35, No. 8, 30-33. 大修館書店.

北出 亮. (1987).「言語活動と指導手順」『英語のコミュニケーション活動』1-19. 大修館書店.

*肥沼則明. (1995).「『話すこと』のコミュニケーション能力を高める『書くこと』の指導」『埼玉大学教育学部附属中学校研究紀要』第31集, 55-64.

*町田喜義. (1976).「LL学習の効果に関する基礎的研究」『LL

通信』No.70, 14-18. ソニー.
松畑熙一. (1994). 「学習意欲を育てる教室の雰囲気づくり」『英語教育』Vol. 43, No. 2, 11-13. 大修館書店.
宮崎信夫. (1985). 「LL における指導プロセス」『LL 通信』No. 125, 13-15. ソニー.
森重良平. (1973). 「録音テストで Production 能力を評価」『LL 通信』No. 53, 8-9. ソニー.
根岸雅史 (1989) 「なぜ Communicative Language Testing か」『現代英語教育』Vol. 26, No. 4, 52-53. 研究社出版.
＊日本教育工学振興会. (1995). 「中学校・高等学校における LL による外国語指導の効果的な在り方についての調査研究 (平成 6 年度文部省『教育方法の改善に関する調査研究』委託研究報告書)」
新島養平, 山下武彦, 真尾正博. (1977). 「学力差に応ずる LL 指導」『LL 通信』No. 76-78. ソニー.
小笠原八重. (1990). 「コミュニケーション能力の測定—Productive Skills を中心に—」『現代英語教育』Vol. 27, No. 4, 52-53. 研究社出版.
＊太田洋. (1993). 「Team Teaching を LL 教室で行う授業」『LL 通信』No. 174, 24-25. ソニー.
大田信男他. (1994). 「コミュニケーションとは何か」『コミュニケーション学入門』3-19. 大修館書店.
＊大塚一夫. (1974). 「LL 学習の効果に関する実験的研究 (1)」『LL 通信』No. 59, 18-23, 31. ソニー.
＊Savignon, S. (1983). *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice* 46. Addison-Wesley.
真尾正博. (1993). 「ティームティーチングと LL」『LL 通信』No. 174, 1. ソニー.
高田諭. (1994). 「オーラル・コミュニケーションの評価」『英語教育』Vol. 43, No. 4, 29-31. 大修館書店.
高橋一幸. (1994). 「中学におけるコミュニケーション重視への対応」『英語教育』Vol. 43, No. 1, 23-25. 大修館書店.
高梨芳郎. (1992). 「コミュニケーション活動の成立条件」『現代英語教育』Vol. 29, No. 3, 14-17. 研究社出版.
田中正道. (1994). 「コミュニケーション能力とテスト」『英語教育』Vol. 43, No. 4, 26-28. 大修館書店.
津田雅子. (1994). 「LL 教室を使った授業の効用」『LL 通信』No. 175, 19. ソニー.
＊山内豊. (1994). 「授業形態, ALT の協力, 教材の種類が LL 教育に及ぼす効果: 1993 年度 LL 設置高校への全国調査に基づく分析」*Language Laboratory* 第 31 号, 135-158. 語学ラボラトリー学会.

資料

資料 1: 本研究を直接的・間接的に進めるために参加した研究会・研修会

<平成 7 年>

5.31 平成 7 年度埼玉県中学校教育研究協議会 (埼玉大附属中)
6. 4 第 1 回英語教育実践ワークショップ (筑波大附属駒場中・高)
6.27 筑波大学英語教育フォーラム授業研究会 (筑波大附属中) 【発表】
7.31 英語授業研究学会関東支部第 29 回例会 (富士見中・高)
8. 2 全国英語教育研究学会浦安大会 (明海大) 【発表】
8.20 英語授業研究学会全国大会 (大阪教育大附属天王寺中)
9. 3 第 2 回英語教育実践ワークショップ (筑波大附属駒場中・高) 【発表】
9.29 LLA 関東支部第 3 回研究会 (杉並区立和田中)
10.20 LL 授業研究協議会 (川越市立城南中・霞ケ関東中)
11.17 第 22 回教育研究会 (筑波大附属駒場中・高)
11.18 第 2 回 LLA 関東支部研究大会 (東京工芸大) 【発表】

<平成 8 年>

1. 6 英語授業上達講座 in Chichibu (秩父市中央公民館)
1.27 英語授業研究学会第 33 回例会 (筑波大附属駒場中・高)
2. 6 LLA 関東支部第 8 回研究会 (練馬区立上石神井中)
3. 2 埼玉大学英語教育研究会例会 (埼玉大教育実践センター) 【講演】
3. 3 第 3 回英語教育実践ワークショップ (筑波大附属駒場中・高)
4.25 ELEC 同友会ビデオ授業研究会 (教育出版) 【発表】
5.25 第 1 回 LLA 関東支部研究大会 (都立戸山高) 【発表】

資料 2: 研究授業②LL ワークシート

(編集部注: 解答欄・氏名欄等は省略)

<Program 6 LL Learning ②> (実: 3D 用)

WORKSHOP

○教科書を見ずに, このプリントだけで学習できます。
○問題は, ヘッド・セットをしないで全員で答える問題 A と, ヘッド・セットをして個人で練習する問題 B〜D の 2 つに分かれています。それぞれの注意をよく聞いてやりましょう。
○問題 B〜D は, 制限時間内なら納得のいくまで何度でも聞き直して結構です。

問題 A 問題 A は本文の内容について説明する文が正しいかどうかを判断する問題です。先生の英語を聞いて, その説明文が本文の内容と合っていたら「1」のスイッチを, ちがっていたら「2」のスイッチを押してください。

次に問題 B〜D を行います。カセットテープをセットし, ヘッド・セットをしてください。また, 前のホワイトボードに示したように, 問題を行う順番を座席毎に指定します。自分がどこから始めるかを確認し, 示されたカウンター・ナンバーのところにテープを送って始めてください。

問題 B (カウンター No. 000) <5 分>

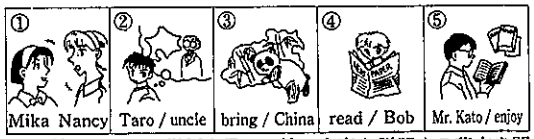
問題 B は, 与えられた 2 つの英文を関係代名詞 which または that を使って 1 つの文にする問題です。

B-1 例の文を見て, テープの後について言ってみましょう。
(例) This is a book. I bought it yesterday.
→This is a book which I bought yesterday.

B-2 例に習って, 次の 2 つの文を関係代名詞を使って 1 つの文にして言ってみましょう。2 つの英文が読まれたあとに答えを言ってください。
① The earth has a beauty. We can't see it on the earth.
② The fish died in two weeks. The Russian astronaut took them into space.
③ We see a lot of damage. We have done it to the earth.
④ Have you ever read an interesting report? A Saudi Arabian astronaut made it.
⑤ We now enjoy many beautiful living things. The earth has produced them.

問題 C (カウンター No. 075) <7 分>

問題 C は, 絵の表す内容をヒントの単語を用いて説明する問題です。



C-1 絵とヒントの単語を見て, 絵の内容を説明する英文を聞きましょう。
C-2 絵とヒントの単語を見て, 絵の内容を説明する英文をテープのあとについて言ってみましょう。
C-3 絵とヒントの単語を見て, 絵の内容を説明する英文を合図のあとに言ってみましょう。

C-4　絵の内容を説明できるようになったら，David 先生のところに行って，絵の内容を説明し，「正解シール」をもらい，右の四角（省略）の中に貼りましょう。

ただし，David 先生が示す絵について 1 つだけ説明できれば OK です。

問題 D（カウンター No. 185）　<7 分>

問題 D は，似たような発音の比較とアクセントの位置について復習します。

D-1-1　heart の [ɑːr] という音と hurt の [əːr] という音の違いを聞き取りましょう。

D-1-2　[ɑːr] という音と [əːr] という音の発音の練習をします。

D-1-3　2 つの音の入った単語の発音練習をしてみましょう。テープのあとについて言ってください。

[ɑːr] heart, far, marble, farm, park

[əːr] nurse, thirdly, birthday, certain, learn, worker

D-2-1　次の単語を最も強く発音するところはどこでしょうか。テープを聴きながら，その部分にしるしをつけましょう。

1　pop-u-la-tion	2　con-tri-bu-tion	3　dif-fi-cult
4　ac-tiv-i-ty	5　mil-lion	6　bil-lion
7　tra-di-tion-al	8　suc-cess	

D-2-2　上の単語を最も強く発音するところに注意しながら，テープのあとについて発音しましょう。

これで問題 D は終わりです。問題 B および C を終えていない人は，テープを示されたカウンター No. まで戻して行いましょう。

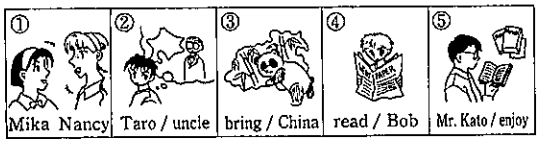
資料 3：ポスト・テスト

<Post Test>

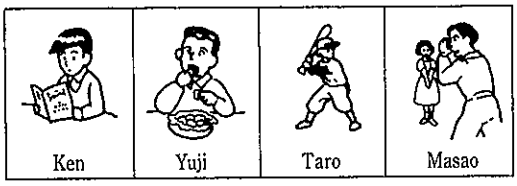
表現力テスト

問題は，問題 A と問題 B の 2 題です。それぞれ注意をよく聞いて答えてください。なお，答えを録音しますので，合図のあとに答えを言ってください。また，答えるときは，答えが他の人に聞こえないよう手で口元を隠し，小声で言ってください。

問題 A　次の絵を見てください。絵とヒントの単語を見て，絵の内容を説明する英文を言ってください。



問題 B　次の 4 つの絵を見てください。この絵を見たある人が英語で質問しますので，その質問に英語で答えてください。なお，答えの最初は The boy で始めるものとします。



（注：質問は二度くりかえす）

これで，テストは終わりです。ヘッド・セットをはずしてください。

資料 4：プレ／ポスト・アンケート

<Pre Questionnaire>

LL を使った英語学習に関するアンケート

○以下の各項目に対してどう思うか，次のような要領で数字で答えてください。答えはすべて下の回答欄に書いてください。なお，左（7）から右（1）へ行くにしたがって「かなりそう思う」から「まったくそう思わない」となっています。

7	6	5	4	3	2	1
かなりそう思う	そう思う	比較的そう思う	どちらとも言えない	比較的そう思わない	そう思わない	まったくそう思わない

問 1　LL を使った英語学習は好きです。

問 2　LL を使った学習は自分のペースで勉強できます。

問 3　LL を使った学習で英語を聞き取る力がつきました。

問 4　LL を使った学習で英文を読む力がつきました。

問 5　LL を使った学習で英語を話す力がつきました。

問 6　LL を使った学習には日頃から意欲的に取り組んでいます。

問 7　今日の LL を使った学習には意欲的に取り組みました。

問 8　LL の装置は使いやすいです。

資料 5：アンケート調査用紙

LL 教室設置および利用実態調査

（編集部注：回答欄は…部省略）

ご記入上のお願い

- アンケートは，全校共通でお答えいただく部分（p. 1 と 6）と，LL 設置校（p. 2～4）または LL 未設置校（p. 5）によって分けてお答えいただく部分で構成されています。
- ご回答は，先生ご自身または英語科主任の先生がまとめてご記入をお願いいたします。（複数の先生についてのご回答の部分は，ご面倒でもお尋ねの上ご記入ください。）
- ご回答は，記号に○をつけていただくか数字でお答えいただく部分がほとんどですが，一部に具体的な記述をお願いする箇所がございます。
- アンケート用紙のご返送は，同封の返信用封筒（切手貼付済）にて 9 月 30 日（土）までにお願いいたします。
- アンケートについて何か不明な点がございましたら，肥沼までお問い合わせください。

（自宅）〒359 所沢市西新井町 2-18-101　Tel: 0429-96-0705

（学校）〒112 東京都文京区大塚 1-9-1　Tel: 03-3945-3231

貴校についてお伺いします

（全校共通でお答えいただく部分：その 1）

問 1　学校名，所在地，英語科担当教員数等をお知らせください。

学校名	国・市・区・町・村立　中学校		都道府県
所在地	〒	Tel.	
英語科担当教員数　人	回答者お名前		教職　年

問 2　貴校では ALT とのティーム・ティーチングを 1 クラスあたりどの程度行っていますか。

1 年	ア 週　時間	イ 月　時間	ウ 不定期（　）	エ 未実施
2 年	ア 週　時間	イ 月　時間	ウ 不定期（　）	エ 未実施
3 年	ア 週　時間	イ 月　時間	ウ 不定期（　）	エ 未実施

問 3　貴校には現在 LL 教室がありますか。

ア　ある…以降，問 4（p. 2）及び問27（p. 6）にお進みください。

イ　ない…以降，問23（p. 5）及び問27（p. 6）にお進みください。

（建設中・計画中を含む）

LL 教室設置校の先生にお伺いします

（LL 教室のない学校の先生は，問 22 へ）

《LL の授業を行う体制について》

問 4　貴校では，LL を利用した英語の授業をどのような形で行っていますか。

ア　英語科で決めたスケジュールにしたがって定期的に行っている。

イ　一応スケジュールは決めるが，臨機応変に行っている。

ウ　スケジュールは決めずに進度や教室の空き具合によって行っている。

エ　使おうと思い立ったときに行っている。
オ　まったく行っていない。
カ　その他（　　）

問5　貴校では，学年別にLL教室をどの程度利用していますか。（各学年ごとに）

1年	ア 毎時	イ 週　時間	ウ 他（　　）	エ 利用しない
2年	ア 毎時	イ 週　時間	ウ 他（　　）	エ 利用しない
3年	ア 毎時	イ 週　時間	ウ 他（　　）	エ 利用しない

※上記にあてはまらない利用法の場合（　　）

問6　貴校では，LLの授業を行う先生をどのように配置していますか。
ア　英語科全員がLLの授業を行う体制をとっている。
イ　一部の教員が自分の受け持ったクラスのみに行っている。
ウ　LLの授業を専門に行う教員を配置している。
エ　だれもLLの授業を行わない。
オ　その他（　　）

問7　貴校では，LLを指導の中のどの部分で利用していますか。（いくつでも）
ア　文法・文型練習　　イ　単語発音練習
ウ　教科書音読練習　　エ　内容理解　　オ　対話練習
カ　書き取り練習　　キ　作文練習
ク　その他（　　）

問8　貴校では，LLの授業に使う教材をどのように準備していますか。（いくつでも）
ア　教科書準拠のLL教材
イ　市販のLL教材
ウ　英語科として作成した教材
エ　担当者が個人的に作成した教材
オ　他校の先生が作成した教材
カ　市町村教委が作成した教材
キ　その他（　　）

問9　貴校では，LLの授業以外にどのようにLL教室を利用していますか。（いくつでも）
ア　選択英語（コース）の授業
イ　他教科（　　）の授業　　ウ　必修クラブ
エ　課外部活動　　オ　自由時間の個人学習
カ　教材録音・編集　　キ　ビデオ視聴
ク　その他（　　）

問10　貴校では，ALTはLLの授業にどのように関わっていますか。（いくつでも）
ア　JTEと協力してLLの授業を運営している。
イ　LLの機械操作（モニターや指示等を含む）を担当している。
ウ　生徒がLLを利用している間に巡視してアドバイスをしている。
エ　LLによる練習以外のコースを担当している。
オ　LLによる練習後の実践的コミュニケーションの相手をしている。
カ　教材作成の手伝いをしている。
キ　まったく関わっていない。
ク　その他（　　）

《LL教室の設備とその利用について》

問11　貴校のLL教室は何年前に設置されたのですか。
ア　～1年　　イ　～5年　　ウ　～10年　　エ　～15年
オ　～20年　　カ　20年～　　キ　不明

問12　貴校のLL教室には，どのような設備がありますか。（いくつでも）
ア　カセット・テープ　　イ　CD
ウ　LD（またはVHD）
エ　ビデオ（VHS，S-VHS，β，8mm）
オ　MD　　カ　アナライザー　　キ　教材提示装置
ク　OHP　　ケ　字幕装置　　コ　コンピューター
サ　その他（　　）

問13　上記の設備のうち，LLの授業でよく用いるのはどれですか。（記号で。いくつでも）

問14　貴校のLL教室に現在なくて，今後ほしい設備は何ですか。（記号で。いくつでも）

問15　LLのメイン装置の中で，次のスイッチをどの程度使っていますか。（個々に）

オールコール	ア 毎回利用	イ 時々利用	ウ 利用しない	エ 装置なし
インコム	ア 毎回利用	イ 時々利用	ウ 利用しない	エ 装置なし
モニター	ア 毎回利用	イ 時々利用	ウ 利用しない	エ 装置なし
ペアコミ	ア 毎回利用	イ 時々利用	ウ 利用しない	エ 装置なし
一斉録音	ア 毎回利用	イ 時々利用	ウ 利用しない	エ 装置なし

《LLの授業の効果や印象について》お答えいただく方の個人的なご意見で結構です。

問16　貴校では，LLの授業を導入してどれほど効果があったと思いますか。
ア　大いに効果があった
イ　少し効果があった
ウ　あまり効果がなかった
エ　まったく効果がなかった
オ　わからない

問17　LLの授業の効果的な面と効果的でない面を，それぞれご自由にお書きください。

問18　貴校では，生徒は一般的にLLの授業を好みますか。
ア　大変好む　　イ　やや好む　　ウ　ややいやがる
エ　大変いやがる　　オ　どちらとも言えない
カ　わからない

問19　LLの授業とALTの関連について，両者の授業における必要性をどう思いますか。
ア　LLもALTも必要である
イ　LLがあればALTは必要ない
ウ　ALTがいればLLは必要ない
エ　LLもALTも必要ない
オ　わからない

問20　LLの授業を行う上での問題点は次のうちどれですか。（いくつでも）
ア　教材が見つからない　　イ　教材の準備が大変
ウ　機器の使い方が難しい　　エ　機器の機能が足りない
オ　機器の故障が多い　　カ　生徒の機器へのいたずら
キ　予算が足りない　　ク　助手がいない
ケ　英語科内の共通理解の不足
コ　その他（　　）
※次に，その中で重大な順に3つ挙げてください。

問21　LLの授業に対する率直なご意見をお聞かせください。（やりがい，効果，問題点等）

LL教室未設置校の先生にお伺いします

（LL教室のある学校の先生は，問4へ）

問22　貴校では，LL教室設置の計画がありますか。
ア　建設中　　イ　計画中（　年以内）　　ウ　要望中
エ　計画なし

問23　貴校にLL教室の設置を望みますか。
ア　ぜひ設置したい……
イ　できれば設置したい……　……問23-1へ
ウ　あまり設置したくない……
エ　設置したくない……　……問23-2へ
オ　どちらとも言えない

問23-1　問23で，アまたはイと答えた理由は何ですか。（いくつでも）
ア　過去にLLを使い，その効果を知っているから
イ　LLは効果的であることを聞いているから
ウ　LLの設置を勧められているから

エ　予算があるから
オ　LL 教室を設置するスペースがあるから
カ　その他（　　）

問 23-2　問 23 で，ウまたはエと答えた理由は何ですか。（いくつでも）
ア　過去に LL を使い，その効果に疑問があるから
イ　LL はそれほど効果的でないと考えているから
ウ　機械相手に学習するのは人間的でないから
エ　装置の操作が難しそうだから
オ　教材準備等の負担が増えるから
カ　生徒のいたずらが心配だから
キ　予算がないから
ク　LL 教室を設置するスペースがないから
ケ　他の設備（コンピューター・ルーム等）がすでに整っているから
コ　LL はすでに時代遅れであり，これからは CAI や CMI の時代だから
サ　その他（　　）

問 24　LL の授業はどんな点で効果があると想像しますか。（いくつでも）
ア　個別学習ができる
イ　基礎基本が徹底できる
ウ　効率の良い学習ができる
エ　生徒が意欲的に活動する
オ　メリハリのある授業ができる
カ　その他（　　）
キ　わからない

問 25　LL の授業と ALT の関連について，両者の授業における必要性をどう思いますか。
ア　LL も ALT も必要である
イ　LL があれば ALT は必要ない
ウ　ALT がいれば LL は必要ない
エ　LL も ALT も必要ない
オ　わからない

新しい LL 授業の提案について

（全校共通でお答えいただく部分：その 2）

問 26　埼玉大附属中では，LL と TT の融合を目指して次のような 3 つのパターンの授業を実践しました。それぞれについて効果的な点と問題点・課題点をご指摘ください。

【パターン 1】（ALT が 1 つのコースを担当）
○A コース…個人が基本的な対話表現を LL で練習する。
○B コース…個人が応用的な対話表現を LL で練習する。
○C コース…個人がテーマに沿って ALT にインタビューする。

【パターン 2】（全員が ALT と対話）
○A コース…ペアが基本的な対話表現を LL で練習した後，ALT にインタビューする。
○B コース…ペアが ALT にインタビューした後，応用的な対話表現を LL で練習する。
※ALT との対話に時間差を設けている。

【パターン 3】（全員が ALT と対話）
○A コース…ペアが基本的な対話表現を LL で練習した後，JTE との対話練習を経て ALT にインタビューする。
○B コース…ペアが ALT にインタビューした後，JTE に結果を報告し，その後応用的な対話表現を LL で練習する。
※ALT との対話に時間差を設け，さらに JTE をクッション役に入れる。

問 27　本研究全般について，ご意見ご感想をお願いいたします。

以上でアンケートは終わりです。ご協力本当にありがとうございました。